

続 1～4年生の子どもへの伝道



有限会社エクティエルシステム 代表取締役
横浜都筑ニュータウンチャペル会員

大村 信蔵さん



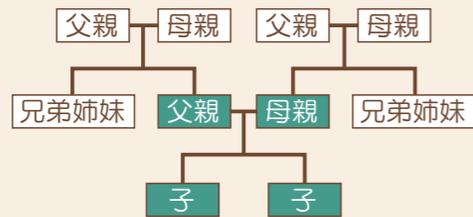
前号は小学一年生から四年生の子どもを信仰に導く方法をご紹介しました。今号では生活面においてお話ししたいと思います。

7、8歳では幼児期とは違い、論理的な思考が始まり、一年前後の個人差はありますが、10歳では言葉の本質的な特徴を理解できるようになります。そのため、お手伝いなど何かをさせるときは、理由も添えて指導することが大切です。またお手伝いをする中で家族のメンバーの一人であるという自覚も芽生え始める時期ですので、褒めながら、また励ましながら育てることをお勧めします。日本では子育ての主体は、母親が多いですが、要所で父親が客観的に褒め、「こうするともっといいよ」と提案してあげると、この時期の子どもはうれしく思います。

父親にはぜひ子どもとコミュニケーションをとるように努力してほしいと思います。奥様からは「いいところどりして」と言われるかもしれませんが、家庭の長は父親であることとを、父親自らが自覚するとともに、夫婦が協力して子育てをすることが望ましいです。

わが子はどんな性格か？

幼児期から小学生の間までに子どもの資質や性格が理解できると、思春期の対応に有効です。同じ両親から生まれた子どもでも一人一人性格や才能が異なります。そのため、子どもへの対応も異なります。子育てに「こうやれば必ずうまくいく」というものはありません。双子だからといって、同じように育てると失敗します。常に一対一の関係で、子どもにどのように対応するか祈りながら、神さまからの知恵をいただいて接していくしかありません。左図は参考になると思います。



緑色の枠が親子ですが、性格や資質・能力はそれぞれの祖父母からも遺伝します。夫婦で子どもが親族の誰に似ているかを研究すると、どのように対応したら良いか見えてきやすいです。

子どもはすぐには成長しない

小学一年生になると、親は少し手が離れる感じがして、幼児期にはやさしかった両親が「もうあなたは小学生なんだから」と、突き放したような態度をしやすいものです。子

どもの発達過程からすると、年長児の時は飛躍的に成長しますが、四年生頃までは心も体もなだらかに成長するので、その子の年齢と適応力に応じて接することが大切です。子どもが学んでいる教科書を読むと参考になります。

三年生頃になったら、自立する準備として、また子どもの資質を見出すために、ゴミ出しや食事作り、衣類や靴を洗うようなお手伝いを年齢や能力に合わせていっしょに始めると良いでしょう。社会に出る前に聖書を基盤として、生活面や精神面においても自立できるように、親子で少しずつ練習することをお勧めします。この時期の子どもはまだ甘えがあるので、母親が主体となって父親が中立の立場で奥さまや子どものフォロワーをする形が良いと思います。(一概には言えませんが)

携帯電話・スマートフォンやゲーム機(DSなど)について

具体的な対処方法は、FJのCDコレクションの115、117(堀井卓氏)を参考にしてください。

大人へと成長する過程で私たちが身につけていく大切なものがあります。それは自制です。これは大人である私たちも大変ですが、子どもにとってはもっと大変です。

「御霊の実は、愛、喜び、平安、寛容、親切、善意、誠実、柔和、自制です。このようなものを禁ずる律法はありません。」(ガラテヤ5

と申しますのは、女性は聖書が語っている通り、男性のパートナーとして創造されました。神である主は仰せられた。「人が、ひとりであるのは良くない。わたしは彼のために、彼にふさわしい助け手を造ろう。」(創世記2章18節)
それからもうひとつ、弱い存在であることを理解していただきたいと思っています。「同じように、夫たちよ。妻が女性であって、自分よりも弱い器だということをわきまえて妻とともに生活し、いのちの恵みをもとに受け継ぐ者として尊敬しなさい。それは、あなたがたの祈りが妨げられないためです。」(1ペテロ3章7節)

小学一、二年生頃の子どもへの対応

小学二年生頃までの男の子はかっこいいヒーローに憧れます。また力で相手をねじ伏せようとする時期です。そのため、男の子の場合は、母親では言うことを聞かない場合が出てきます。父親としてリーダーシップを発揮するチャンスです。女の子も勇敢な優しいヒーローに憧れます。身近な父親が信頼できるヒーローになれると幸いですね。幼児期もそうですが、特にこの時期、父親と一緒に遊んだり、スポーツをしてあげたりすると、子どもはとても喜び、親子関係の基礎が作れると思います。

章22、23節)

「神が私たちに与えてくださったものは、おくびよりの霊ではなく、カと愛と慎みとの霊です。」(IIテモテ1章7節)

また、「**慎み**」の英訳は自己鍛錬です。自己鍛錬とはアスリートが勝利を得るために、セルフ・コントロール以上のことを自分に課して、自分自身を鍛え上げている姿を想像してもらおうと分かりやすいと思います。子どもの時は自分自身をコントロールすることは難しいので、神さまの代わりに両親がコントロールする必要があります。携帯電話やゲーム機の使用については、子どもと話し合って決めることが大切です。はじめをつける訓練も年齢とともにハードルを高くすることが大切です。最終的には子ども自身が神さまとの話し

